

日米大学生の手指の巧緻性の実態と意識

○川端博子*・鳴海多恵子**・鞠古綾**・Nancy Rabolt*3・日景弥生*4
(*都立短大、**東京学芸大、*3サンフランシスコステート大学、*4弘前大)

(目的) 現代の利便な生活の中で手指を使用する機会が減少し、手指の機能性の低下が指摘されている。女子大学生を対象とし、手指の巧緻性の実態を測定するとともに、日常生活及び自信の程度や性格特性との関連性について考察した。アメリカとの比較により日本人の特徴を把握し、手指の巧緻性の認識に及ぼす生活環境の影響について推察した。

(方法) 調査対象者は、日本の女子大学生227人とアメリカの91人であり、「糸結びテスト」と質問紙調査を実施した。調査内容は、属性、日常生活の過ごし方、日常の行動で自信のあること、手指の器用さに関する認識とその判断理由および性格である。

(結果) 糸結びテストの平均値は、15.6(日本)、15.1(US)であり、両国で差がみられなかった。生活様式の利便性において、両国とも同程度であることが一因と考えられる。また、成人では手指の利用に関する経験が多様化するためか、手指の巧緻性に影響を与えると思われる日常生活についての活動を特定するには至らなかった。糸結び数の上位、下位に属する各々25%のサンプルを選び、特徴を比較した。日本人の上位群では学校の成績、運動能力、計画の達成、辛抱強くやり通すことに自信を有し、性格面でも社会適応性、活動性、外向性で高い傾向がみられた。糸結び数と器用/不器用の判断は概ね一致し、不器用とする理由として、他者との比較によるとする割合が高かった。アメリカではあらゆる活動に自信を有し、積極的に自己を主張する傾向がみられ、手指の巧緻性と他の活動への自信や性格に関係はみられなかった。手指の器用さに対する認識の仕方は、日米で異なることが明らかになった。日本においては、手指の巧緻性が、多方面の活動や自信の抱き方に影響すること、人と比較せず、自信を抱かせる教育の取り組みが重要であることが分かった。